

# 解釈学の視点から見た『万葉集』の組織

西 澤 一 光

## 一 『万葉集』テキスト論序説<sup>(1)</sup>

さて、われわれに与えられているのは、『万葉集』の「組織」について思考することだ。

言い換えれば、『万葉集』の「組織」を「段階的成立」のストーリーで理解するのではなく、「段階的」に成立しているように「見える」ことについて思考することである。

しかし、それは、『万葉集』の組織とはかくかくしかじかのもので「見える」という言葉遣いで語られるものではないだろう。それでは、『万葉集』が何らかの統一的な「意図」によって編纂されたと説明すること（「動機論的説明」と同義であり、『万葉集』の現実から離れることになる。

『万葉集』の現実とは、つねに読む者にその統一的企図の不在をつきつけてきたのである。

実際、『万葉集』二十巻は、複数の視点、複数の歴史観を包含していると考えたと無理なく読むことができる。つまり、『万葉集』内の各巻は固有の自律性を主張しながら、同時に、二十巻としての緩やかな全体に集蔵<sup>アイカイ</sup>されている。

各巻の編纂方式は「部立」や「標目」や「題詞」あるいは編年によって明示されており、各々に固有な秩序は誰が見ても明確だから大きな議論にはなりにくい。しかし、二十巻の全体性は巻が並んでいるという事実以外の明示的要素がないため議論になってきた。実際、『万葉集』の全体がどのような「組織」になっているかについては、従来、論者によってさまざまに「解釈」が提示されてきた。だが、私はこの問題について、契沖や澤瀉久孝の思考の延長上に、「集蔵体」という概念<sup>(2)</sup>によって考えることを提案している。『万葉集』の「集蔵体性」は、「巻」の問題に限定されな

い。題詞中の職階の表記については仙覚、契沖以来着目せられてきたことだが（後述）、各々の作品の表記、群としての「歌集」の表記、原資料としての「歌集」の編纂方式など、『万葉集』の「集蔵体性」は、多元的な位相において見出すことができる。

つまり、『万葉集』が「集蔵体」であるというのは、各巻と二十巻全体との関係ということにとどまらない問題で、その根底は原資料の文字列の「集蔵」というところに及ぶのである。澤瀉久孝が「家持が既成未成の撰集歌集などを二十巻によせ集めた時、すべては出来る丈原本の体裁を尊重したのではないかと考へられる。」と説いたことの意義は今日でもなお考へるべきものを与えている。

言い換えれば、「集蔵」という操作は、原資料を書き変えたり、極小に切り刻んだりせずに、資料の原態をできるだけ尊重する態度とすることができる。契沖、澤瀉久孝、稲岡耕二がこの問題に着眼してきたことは、すでに他の所に述べたが、この人びとがいずれも歌を原文の漢字文字列を重視して訓詁注釈していることは偶然ではない。

『万葉集』の「集蔵体性」は、原資料の文字列の保存と表裏一体の問題を構成しているからだ。つまり、『万葉集』の「組織」が一義的な「意図」に還元できるようなものではないということと、『万葉集』の書記が多様であると

いうことは表と裏の関係にあるということなのである。

先に述べたように、『万葉集』全体の「組織」を描くような言説を『万葉集』の内部に探しても存在しない。それは常に「読みとられてきた」に過ぎない。

しかし、『万葉集』の書記は、その「組織」の多元性——「集蔵体性」——を裏側から照射しているのである。「組織」の多元性と書記の多元性は、『万葉集』における「集蔵体性」という現実の二つの側面だ。

#### 一 漢字文字列の書記から「組織」の考察へ

右のようなわけで、『万葉集』の「組織」の考察において『万葉集』の書記の多元性への視座は不可欠なものだ。しかも、『万葉集』の現実の根底は、そのテキストがすべて真名（漢字）で書かれているということである。

いかなる措定が崩壊しようと、このボトム・ラインが崩れることはない。その意味で、『万葉集』のテキストをその漢字文字列において読むという態度の正当性は数学における公理 Axiom に相当する。契沖以降の「訓詁学」はこの公理の上に構築され、発展してきたと言つてよい。

そして、この原文の漢字文字列に即して読むという態度からは、次の二つの知見が導き出されてきた。

A いわゆる出典語にあたる漢字文字列は、倭語を写す

道具ではなく、倭語に先行して漢籍のなかにあるということ（「出典論」の問題系）。

B 『万葉集』の書記エブリチヤルは作者それぞれのスタイルでさまざまなに書かれたのをそのままに保存したケースがあると推定されること（「特有言語「diotome」の問題系」）。

Aは、契沖から始まり、澤瀉久孝、小島憲之、芳賀紀雄への流れの中で定礎されてきた考証学的出典論の知であり、これによって、「万葉びと」の厨の中には漢籍があつたということが、もはや当然の知見となつてゐる。そして、漢字で書かれた倭歌の言葉を漢籍との直接ないし間接の関係の中で理解することは『万葉集』を読む際の不可避にして不可欠の方法となつてゐる。契沖以来『万葉集』はそう読まれてきたのだし、また、そう読むことで理解が深められるという享受史をわれわれは今現に生きている。

Bの知見も契沖に始まる。契沖は諸家（個々の作者）の文字言語の特徴が——編纂者による均一化を免れながら——維持されていることに言及している。特に稲岡耕二、古屋彰の研究は「歌集」で示される範囲を一群の資料体 corpusとして扱ふことを論証した議論として意義が大きい。

以上のA Bは、公理から導き出された定理 theorem として位置づけられるべきものと言える。これは偏に『万葉

集』の編纂問題に関わる問題にとどまらず、「漢字」で邦士の詩歌を書くことがもたらす諸結果 II 諸効果 effects の一環でもあるという点で絶対に看過できないことがらである。おおよそ文学研究がその表現そのものに着目しなければ抽象に陥るほかはない。

そして、これらに着目する限り、『万葉集』における原資料の尊重という態度——ここで言う「集蔵体性」——は、われわれに対して思考すべく与えられていると言わざるを得ない。しかも、これは、『万葉集』が巻ごとに異なる表記、編纂方式、歴史観をもつてゐること、つまり、『万葉集』の「組織」そのものと連動する問題、まさに編纂の根幹に関わる問題である。『万葉集』における原資料の尊重という態度は、「集蔵体性」——緩やかな全体性とそこに包摂される複数の編纂視点という事実——と包みあつてゐるのである。

繰り返し言うが、『万葉集』の「組織」は、一義的な視点から展望されるような形で語り得るものではない。また、語るべきものでもない。かつ、書記エブリチヤルを無視して語ることは絶対にできない。

この『万葉集』の現実から出発するかぎり、『万葉集』の「全体性」は、複数の編纂視点を包摂し得るような「全体性」として思考されるべきものということになる。

それは果していかなるものであるのか。

要するに、もし、『万葉集』に「組織」という言葉で思考すべきものがあるとすれば、それは可視化できるような構造のことではなく（それは、いわば統一不可能な、雑多な全体としてしか現前しないだろう）、可視的には「集蔵体」であるような「全体」を与える基盤だ。それがいかなるものなのかという問題なのである。

## 一― 神野志理論に対する批判

以上瞥見してきたように、『万葉集』における、資料を原態のままに「集蔵」しようとする思考は、文字レベルから歌レベルまで、そして、「家集」レベルから巻レベルまでに及んで、多元的に機能している。

実は、こういう「組織」に関して今まででもっとも整合的な展望を与えてきたのが伊藤博の研究だ。伊藤学説は複数時点における複数の編纂者による編纂作業が最終的に大家持のもとで集約されるというストーリーを提示している。

一方、伊藤学説に対しては『万葉集』のあるがままのテキストを「成立論」に解消するものだと厳しい批判が神野志隆光によって寄せられている。神野志は「テキスト論」を「成立論」に対置しながら立ち上げている。

しかし、私は二つの点で神野志理論に否定的であり、むしろ、伊藤学説の方が『万葉集』を読めるようにしてくれていると考えている。伊藤学説の検証には、そのバックボーンとなる歌学、国学の検証が必要になるので、その可能性については後の節で述べるとして、この序説では、神野志理論に賛成できない理由を述べておきたい。

第一に、神野志隆光の『万葉集をどう読むか』は、「歌の「発見」と漢字世界」を副題に銘打ちながらも、「漢字世界」そのものについては積極的に触れようとしないことだ。ところで、『万葉集』にとつての「漢字世界」とは端的に言えば出典論の世界だ。さきほど述べたように、『万葉集』の文字は「漢字」であり、出典上の根拠を「漢字世界」にもっている。しかし、神野志理論は原資料を指定することを強力に否定しているから、理論構制として、『万葉集』中の出典論的な読みをすべて否定せざるをえない。「人麻呂歌集」や「家持」の指定を否定しながら、漢籍の出典を勘案するならばそれは理論的な破綻を意味する。神野志理論は一つのパラダイムの提示という形態をとるから理論構制上の矛盾は致命的だ。

このことは『万葉集』の「組織」の議論にも当然影響してこざるをえない。神野志は「部立」の問題にほとんど触れていないが、後述するように「部立」は中国詩学からの

発想なので「部立」を思考すれば『万葉集』の外部を考えざるを得なくなる。

一方、『万葉集』の「組織」についての思考において「部立」を重視しないのはテキストそのものの軽視である。「部立」より一元的な「歴史」を重視する神野志説はテキストから乖離している。いずれにしても、『万葉集』の外部を考えないという理論そのものが破綻しているのだ。

神野志理論を否定する第二の理由は、神野志理論が、実は伊藤理論に基礎づけられているにも拘らず、これを「成立論」として批判するという自家撞着に陥っていることだ。

要するに、神野志は二十巻を「歴史的構築」の巻一〜六、「歌の世界のひろがり」と可能性」の巻七〜十六、「個において歌の世界を生きることを示す」巻十七〜二十というように三つのブロックに分割して説明するのだが、この分割方法は、巻六と七のあいだ、巻十六と十七のあいだに分割の線を引いて『万葉集』全体を捉えるという伊藤の発想と全く同じである。結果として神野志説は「段階的成立論」の内部に収まってしまっている。

神野志理論が伊藤学説と異なる点があるとすれば、それは『万葉集』に包摂される複数の視点という問題を消去して——伊藤はこの問題を消去せずに「発展段階的」に捉える——『万葉集』のテキストを「フラットに」捉えようと

するという点だ。神野志は、伊藤が掴みだした『万葉集』編纂の「意図」の複数性という問題を意図的に消去し、「歴史的に構築された歌の世界」と呼ぶところの、抽象化された「意図」によって均質化しようとしている。しかし、それが『万葉集』の現実を埒外に置く結果になることについては右に述べたとおりである。そもそも『万葉集』が「歌の世界」なのはあまりにも当然すぎることなので、これでは『万葉集』全体に関する規定としては何らの働きもなさない。したがって、「二十巻全体をフラットに読む」という提言は、実際上は三分割論に帰着してしまっている。神野志理論は三つの部分が足し算的に成り立たせる「全体」が「歌の世界」だと言っているに過ぎず、それがめざしたはずの『万葉集』の「全体」が何であるのかにまで踏み込めてはいないのである。

むしろ、神野志理論は、結果的に、伊藤学説の輪郭をなぞるものになってしまっている。

### 一三 伊藤学説への批判とその可能性

一方、伊藤学説に関して批判すべきものがあるとすれば、それは、「複数の視点」を実体化して、たとえば、「元明万葉」とか「風流侍従」といった次元にまで具体化してしまふところであろう。

たとえば、伊藤によれば、卷三と卷四は、もともと藤原朝までの歌の「拾遺歌卷」があり、それがいったん解体されて、奈良朝の新しい歌を多数増補して出来あがったとされるのだが、元の「拾遺歌卷」を編集したのは聖武天皇に「風流侍従」として仕えていた六人部王・長田王・門部王・佐為王・桜井王といった人々で、その編集作業は養老末年から神龜年間にかけてなされたとい<sup>13</sup>う。

たしかに、卷三、四に家持の関与以前に成立していた部分があつたことは十分に推測されることだが、確実なのはそこまでである。「風流侍従」などもちだして議論が具体化されるとそれがまるで事実であるかのような錯覚を生むし、実際、「風流侍従」論はすでに一人歩きを始めてしまっている。しかも、「風流侍従」を立てても『万葉集』編纂の思想が一向に明らかになつてきてはいない。

「風流侍従」以外にも問題はあ<sup>14</sup>る。たとえば、後に述べるように、「元明万葉」といつたことがどれだけ正当な議論たりうるのかは依然として疑問なのであり、それは伊藤構造論の全体を揺るがしかねない問題性さえ孕んでいる。

にもかかわらず、伊藤学説は、読みとして裨益すべき成果を数多く含んでいる。伊藤の立てたストーリーは、『万葉集』という全体が複数の視点、複数の時点、複数の編纂

論理を包摂して成り立っていることを照射しているからだ。

## 二 編纂論の歴史的地平

ここでいったん議論の方向性を転換して、『万葉集』の編纂についての議論をもっと包括的な歴史的地平にすえなおしたい。そもそも伊藤博の『万葉集の構造と成立』（上・下）自体、伝統的文学・国学の知を集大成する形で練り上げられたものである。文学・国学の知はわれわれに『万葉集』を読めるようにしてくれた基礎論である。われわれは『万葉集』の「組織」という基礎論をやっているのだから、当然、そこに立ち戻るべきなのである。

### 二一 仙覚と契沖

さて、従来の、文学ならびに国学における編纂論は、『万葉集』の名義、成立年代、撰者の三点セットをめぐる練り上げられてきた。

伝統的文学においては『古今和歌集』の両序が検討の主たる根拠となつているが、その様相は仙覚抄あたりから変わり始める。仙覚はテキストそのものから出発して『万葉集』という書物について思考した最初の人だ。それは、『万葉集』から三つの「道理」と三つの「文証」を読みだして、編纂論を展開するという仕儀のうちに示されている。

すなわち、「万葉集」という名義に関しては『古今和歌集』の仮名序にもとづいて「よろつこのの葉」の義とする旧来の説を肯定する一方、成立の時代に関しては「聖武天皇御時の撰」という説を①神龜ならびに天平における歌の多さ、②作者の官途の年代、③聖武帝に関しては「天皇」と記す他にいずれの天皇かを特定するための注がない（ゆえに「当代」である）といった「道理」の観点から提出する。さらに、④「文武を大行天皇」と呼ぶこと、⑤「先太上天皇」という言い方が持統や元明にはなされず、元正になされていること、⑥年月不審な歌や伝誦された歌が天平年間から天平勝宝にかけての歌巻に収載されていることも聖武時代の編纂の証拠とする（『三文証』）。

撰者については「如当集現文者橘大臣大伴家持兩人為撰者歟」と諸兄・家持兩人説を主張する。橘諸兄については「先達」が多く指摘することに従うとし、奈良麻呂を餞した宴席で諸兄が家持の歌の尾句を改めたところある四二八一歌左注を引いて補強している。家持については卷十九卷末の「但此卷中不稱作者名字、徒録年月所処縁起者、皆大伴宿祢家持哉作歌詞也。」などの「証拠」を引いて「皆是家持所註也」とするのは新たな知見だった。

総じて、仙覚は、「文証」に即して——つまり、テキストを読むことで——『万葉集』の内部に包摂されている視

点を発見したことになる。私が主張しているような視点の複数性に言及しているわけではないが、仙覚のような読み方を『万葉集』の他の歌巻に転ずれば、家持とは異なる視点も読みとられる。仙覚が「時代」や「撰者」に関する知を大きく組み替えたことはまちがいない。

契沖は、「古来」の勅撰説を徹底的に否定するとともに、仙覚説を批判的に継承している。とくに諸兄・家持の兩人撰者説に関しては徹底して否定し、「普く集中を考へ見るに、勅撰にもあらず、撰者は諸兄公にもあらずして、家持卿私に若年より見聞に随て記しおかれたるを十六卷までは天平十六年十七年の比までに廿七八歳の内にて撰ひ定め、十七卷の天平十六年四月五日の哥までは遺たるを拾ひ、十八年正月の哥より第二十の終までは日記の如く、部を立てず、次第に集めて宝字三年に一部となされたるなり」（原文は漢字カタカナ文だが読みやすくするために平仮名書きに改め、かつ適宜読点を補入した）と格段に精密化した結論を導いている。これは大方今日でも有力な仮説といつてよい。

とくに契沖が強力に繰り返して言うのが「家持の私撰の証」「家持の私撰の詞」という言い方で、このことは大伴関係の作者への待遇表現のしかたが家持の視点から組織されていること、大伴関係の作者についての注がとくに詳し

くなされていること、さらには卷十七から二十までが「日記の如<sup>16)</sup>」き「一家の私撰<sup>17)</sup>」と見られるものであることなどによって主張されている。

たとえば、代匠記初稿本に「大納言大伴卿、いまた微官の時より名をしるさず。」「廿卷のうちつゝに旅人といへることなし。たとひやかもち撰者なりとも、勅撰ならはひとり父にわたくしせんや。これ家に撰してち、をうやまへるなり。」<sup>18)</sup>という次第なのだが、『万葉集』の言説空間を規制している言語秩序が「勅撰」のそれではなく、私撰のそれであることに触れた言であり、鋭い着眼である。

また、「歌日記」と呼ばれる末四卷に関しても、「拙懐」という「謙退の詞」が三箇所に用いられていることを指摘して、「家持の歌にのみ此謙退の詞あり。知るへし、他人の撰にあらすと云ふことを。」<sup>20)</sup>と述べる。

ちなみに、この「拙懐」については、新大系の四二八五歌題詞注に

題詞の「拙懐」は家持自身の類例「拙詠」（三九七六

の前の詩文）とともに漢籍に用例未見。（中略）家持が自らの思いを謙遜して言った語。「これ家持の撰なるゆゑに、卑下の詞有て、作者の名なし」（代匠記（初稿本）。少なくとも、この巻が家持の編纂になる

ことを証拠づける語。

とふれる。なぜ家持歌巻に「拙懐」「拙詠」という言葉が生成するのか。そのことへの回答として新大系の注釈は読み過すことができない。「夜裏」といった言葉もそうだが漢籍にありそうで見当たらない家持語彙というものがある。家持の「特有言語 domain」については別のところでもふれたが、新大系の「漢籍に用例未見」という注釈はその問題に触れるところがある。

さらに言えば、家持語彙の可能性がある「拙懐」が用いられているのはいずれも時節の移ろいにあたっての感興を詠んだ作であり、いかにも家持的な主題だ。「拙懐」という表現による一人称の露出には積極的な表現意図があるにちがいない。<sup>22)</sup>しかも、それは作者が編者でもあるがゆえに可能になる表現だ。

要するに、大伴家持の『万葉集』に対する関与はかなり複雑で、「編集される家持」と「編集する家持」の両方を見てかかる必要がある。また、その方が二十巻全体への関与という問題にも対しやすい。

ともかくも、家持編者説というものが、実際に『万葉集』を読むところからスタートした仙覚、契沖の議論によってもたらされたことは念頭におくべきだろう。そして、家持編者説が『万葉集』の現実から与えられた視点だということはいくら強調してもよい。



二二 真淵、宣長から山田孝雄まで

しかし、契沖は勅撰説という伝統的な解釈を打破しようとすることに集中するあまり、「家持の私撰」という見通しによって議論を一貫させてしまった。

そこが問題なので、現実の『万葉集』は、一つのペースペクタイプからは見渡せないような、多岐にわたる、錯雑たる「組織」をもっている。『万葉集』全体を「家持」の視点で一望することはできないのである。

たとえば、真淵は、「六卷万葉」(一、二、十四、十一、十二、十三の「古撰」六卷)のみを橘諸兄の撰んだ真の万葉とし、他の十四卷は「家々の集」の混入したものと見て、これを排除する。従来これは真淵らしい武断的態度と解されてきたが、その説があなたがち荒唐無稽と言いきれないのは、彼のあげている「六卷」が、いずれも大伴の息のなかった度合いの低い巻だからだ。

また、「廿巻ともに家持撰也」とする宣長の「全篇巻の次第の事」は、五類に別たれる「前撰」の歌卷一四卷(卷一・二・三・四・六・七・八・九・十・十一・十二・十三・十四・十六)と、「後撰」の歌卷六卷(五・十五・十七・十八・十九・二十)とを区別し、「前撰」「後撰」を合して二十巻としたものが現在の形態の『万葉集』だとする。その理由は、二十巻が「一つ、けに次第して集めたるも

のにあらざれば、卷々のついては、年代を以ては定めかた<sup>②</sup>く、又、歌の類をもても定めかたし、た、卷の類を分て、おのおの別に次第すへし」ということになる。

宣長に至って、「廿巻ともに家持撰也」という考えと「一つ、けに次第して集めたるものにあらざれば」(前撰は五つの「類」に分けて考える)という把握とが同時にもたれることになったわけで、「家持」という編者はいるが、統一的な企図に基づく編纂にはなっていないということが、『万葉集』固有の問題として明確に定位される。これは近代以降へと受け継がれていく考え方だ。

山田孝雄は「万葉集と大伴氏」という論文で

万葉集は二十卷であるが、首尾貫通統一した組織をもつてゐるものではない。

と言っているのだが、実は『万葉集』の全体についてそれなりの構造を見通そうとしてもいる。前文にすぐ続けて山田は、

その最も著しい差違は卷一乃至卷十六の一団と卷十七乃至二十の一団とである。

乃至二十の一団と云つてもこれ亦種々の組織から成つてゐて十三種に分けて考へねばならぬ。

とし、卷一から卷十六までについて巻ごとの「組織」のあ

りようを記述したうえで、

以上、十六卷は十三種の歌集の累積であつて一貫した統一見えない。之に反して卷十七以下の四卷は一連統の歌の記録で、(中略)年月を追うた歌の記載で一貫してゐる。<sup>(27)</sup>

と一旦は総括している。こう概観したうえで、山田は卷十七以下の四卷は「家持の歌日記のやうなもの」とし、種々考察の上、結局次の如き論述を展開する。

以上、卷十七以下では家持の手になつたことは疑ひはあるまい。而して卷三が家持の編したものとなれば卷四もそれにつれて家持の編となる。しかし、卷一、二はそれより以前に既に成立してゐたであらう。卷五と卷十五とは恐らくは大伴家に伝はつてゐたものをそのままとつたものであらう。卷八は大伴家の歌が大部分で、その部門の全部又は後半部を占めてゐるから、これ亦同様であらう。かういふやうに考へてみると、大伴一家と万葉集の編纂とはもはや切つても切れぬ関係のあることは考へねばならぬ。ここに想像を逞くすれば、卷一、二は古く成立してゐたもので大伴氏の手に成つたものではないかもしれないが、それに続編として加へたものが、卷三、四の一団で、これは大伴氏の手に成つたものであらう。而して、それに大伴氏に伝

つた大宰府時代の歌の記録をそのまま加へたものが、卷三、四の一団で、これは大伴氏の手に成つたものであらう。<sup>(28)</sup>

この十六卷までの間には古い歌集や歌の記録をそのまま取り入れた部分もあるが、いろいろさまざまに歌集の編纂法の試みられたのがそのまま伝はつてゐることまことに尊ぶべきことであらう。さうしてかやうなことを行つたのはやはり家持であつたらう。<sup>(29)</sup>

山田以前に卷一・卷二は勅撰だつたという品田太吉説<sup>(30)</sup>が出されているが、山田は「卷一、二は古く成立してゐたもので大伴氏の手に成つたものではないかもしれない」といつたところに結論を落ち着けている。

この段階で、最終的な編者は家持だが、二十巻中のもつとも古いと目される部分である卷一・卷二は、「大伴氏の手に成つたもの」ではなく、さらに、二十巻の全体は統一的な見通しから編纂されたものではないという見方が固まつて来たということになる。

### 二二三 三大部立の意味を捉えかえした伊藤説

以上みてきたような道筋をたどつて家持を「最終的な編纂者」とする議論が立ちあがつて来たことになる。さて、この「最終的な編纂者」とは何を照らし出す語なのである

うか。

この点で議論の基軸になりうるのが伊藤博の『構造と成立』だ。伊藤学説の骨格は、契沖や宣長に於いては単に「類別」の原理として捉えられていたに過ぎない。「雑歌」「相聞」「挽歌」の三大部立を、二十巻全体の「母体」をなす原理として捉えかえした点にある。

伊藤説の論理構制は、徳田浄の『万葉集成立攷』における議論と重なるところが大きいのだが、その論理の基点は巻一の五三歌までを「原巻一」としてとりだすところにある。

まず、五三歌までの作がまとめられて単独の歌巻をなすような状態——「原巻一」——を措定する。この議論は天皇代の標目並びに題詞の書式という客観的「文証」にもとづいてなされている。

さらに、澤瀉『注釈』の分析を踏まえつつ、巻一の増補部分（文武朝以後）における「太上天皇」「大行天皇」「天皇」という呼び分けの意味するところが元明帝を当代とする視点の表示であると捉える。

こうして、元明帝の時代に巻一と巻二が総合されたというストーリーが描かれている。「原巻一」の五三歌までの歌に「増補」が皆無だったとは言いが切れないが、全体として卓越した発想だと言えらる。敢えて言えば、仙覚、契沖、

真淵、宣長の眼でも見出すことの出来なかつた書式上の切断面が見出されたと言えらるだろう。

元来、巻一と巻二は、同時に編纂されたというには、題詞の書式等、体裁の点で非対称な要素をもっているのだし、まず原巻一があつて、これが後に巻二の原形と対になって三大部立を包蔵するところの「綜合体」をなしたとするストーリーは、最初から「三大部立」構想のもとに巻一・巻二が編纂されたとするよりはるかに説得的である。「段階的成立論」は文献学上の意義を失わないのである。

それ以上に、個々に成り立つた巻を包摂するための論理としての「三大部立」の意味が捉えだされたのが大きい。

伊藤は言う、

両巻の三大部立は、かならず、巻二の原形が（巻一の原形に―筆者補）併されたときの命名である。部類の名は、対立する他の類との区別を明確にしようとするときにはじめて考案されるものであつて、巻一が単一の形で誕生した折に、それ一つのみを『雑歌』と称することに意味がないからである。

と。

なるほど、「雑歌」と呼ばれる巻一から始まる構造を可能にしているのは巻一と巻二をあわせて一単位を見る思想である。同じく、諸本上の問題はあるにせよ、巻五、巻六

がそれぞれに「雑歌」と冠せられて一卷をなすのも、「三大部立」が集蔵の原理として機能していることを意味する。まさに『万葉集』の集蔵原理は巻一と巻二の「総合」から生まれたのである。

しかし、ここで、敢えて伊藤の論理構制の翳の部分を実際立たせる流儀で論を運ぶならば、伊藤が巻一・巻二の「綜合体」の形成を捉えるに際して駆使した、「増補」という論理、そして「藤原宮本」とか「持統万葉」とか「元明万葉」といった呼称は、「成立」の動態を可視化するように見えながら、かえって伊藤の議論そのものを掘り崩す結果となっているのではないか。

たとえば、持統の意のもとになった「持統万葉」がやがて「元明万葉」へと成長していったという説明——『構造と成立』（二、三、九章）——は意味のあるものなのだろうか。

これは、歴史的な証拠がないというだけではなく、そもそも天皇の「発意」という概念が便宜的すぎると思う。「持統万葉」たる原巻一が「三大部立」の原理のもとに吸収されるというストーリーを完結させるために、その「総合」を元明帝に負わせるというのは過剰な物語ではあるまいか。

巻一〜巻三に関しての持統帝のプレゼンスには卓越した

ものがあり、持統と『万葉集』の編纂との関連が論じられることに違和感はないが、果して同じことが元明帝にも言えるようには思えない。

巻一・巻二の「総合」を誰が企図したのかという問題は、現状の『万葉集』から出発して考えることはできないと言った方がよい。当然家持でもない。

重要なのは、「最終的な編纂者」にとつて、この巻一・巻二が既存の歌巻として先行してあったということであり、両巻を「総合」する「三大部立」の原理を『万葉集』の集蔵原理に拡大していったということだ。

### 三 三大部立と『万葉集』

巻一・巻二の「総合」の過程で定礎された「三大部立」は、後の歌巻で反復されていく。それは、春・夏・秋・冬など、他の類別とも複合・共存しつつ生き延びていき、言葉の内実を変化させながらも『万葉集』を蔽う概念となっている。これは「三大部立」という切り口が、歌を対象化して捉える際の強力な準拠枠となっていた結果だと言えるだろう。

三―「歌学」の定礎——『文選』から『万葉集』へ

さて、「三大部立」の概念は、いかに定礎されたのか。

たとえば「相聞」という語に關して、『万葉集攷証』や『万葉集古義』の時点ですでに『文選』という名が挙げられているわけだが、そこには歌の集の編纂に關しては詩集が参照されたと考えるべきだという至極眞つ当な発想が働いていたのである。

小島憲之がこうした流れを受けて「やはりまづ文選に目を向ける必要がある。」と述べているのは重要だ。しかし、『文選』に「相聞」の用例は一つしかなく、また、「相聞」は書簡用語——とりわけ書家王羲之の法帖尺牘類における——に由来するものであるという見逃せない事実があつて、かつそれらの知見を踏まえて小島は次のようにまとめていく。

万葉集の分類が文選のそれによつたとみる場合に、「贈答」(詩部)よりも、むしろそれ以上に「書」の部をみならつたものとみるべきである。

つまり、文選の分類の一つである「書」の部(或は「書」といふ文体)に暗示を得、特に書簡法帖類によつて「相聞」(この場合は主として動詞である)の意を知り、これを名詞として万葉集の部立の命名として採用したものと云へる。

と。つまり、「相聞」の語は書儀・尺牘の類から受容されたものであり、とりわけ「相聞」という言葉への嗜好をう

んだ背景としてこの語が王羲之の法帖に見えることを挙げながらも、これが歌集の分類名として、雑歌・挽歌と並ぶためには「書」という部立が『文選』にあることが重要な根拠だつたと見るのである。

小島が『玉台新詠』ではなく、当時の官僚の「知」の台座たる『文選』の方をあげるのも、固有の「歌学」を定礎しようとする意志がそこに見込まれてのことであろう。

この定礎は先ほども言ったように非常に強力な準拠枠を与えることになつて、巻六、巻七、巻八、巻十、巻十一、巻十二、巻十三、巻十四のような巻々にも、さまざまな形で組み込まれることになつていく。ここでは巻七と巻八の場合について見ておくことにしたい。

### 三二 卷七の「知」

卷七については、雑歌部の前半が『芸文類聚』の分類様式を取り入れていると目されること、はやく土田知雄が述べているところだ。小島憲之が明らかにしたようにこの書物は上代の官人の知の台座をなすものだった。

さらに、渡瀬昌忠『万葉集全注』巻第七は、「雑歌」部が〈天象↓地象↓人事〉という〈天地人の三才〉の配列になつていることを詳細に分析している。渡瀬は、天・地・人の三才という世界観は、「中国の辞書や類書(百科全書

的詞華集)や詠物詩の分類に見られるもの」であると述べている。

それは、中国現存最古の字書『爾雅』、漢の劉熙が撰した『釈名』八卷、初唐の歐陽詢の撰した『芸文類聚』百巻などを通じて上代の列島にもたらされた知である。こうした辞書や類書は、上代の貴族の漢字のための基本書であり、「漢字世界」そのものの現前であるといつてよいから、それらを貫く天・地・人の思想的枠組みが、「歌の世界」を捉えるための分類の網の目として応用されたのは当然だ。

巻七という「組織」は中国文明の「漢字世界」の「知」に基づいて構成されているのである。

ところが、この巻七を構成するもつとも外側の枠組みは「雑歌」「譬喻歌」「挽歌」である。「詠○○」を基軸とする部分を「雑歌」の部とし、「寄○○」で分類される部分を「譬喻歌」の部として、最後に付けたりのようにして「挽歌」が少数載せられている。それはいかにもとってつけたかのような「三大部立」の姿であって、この巻の眞の狙いが直叙的な詠物と比喩的な寄物に歌を分けるところにあるのは、「詠物」「寄物」の分類項目が並ぶところで了解されるであろう。

そして、それは、巻七が「人麻呂歌集」を原資料の一つとして集蔵していることも深く関わるのではないか。<sup>38)</sup>

いずれにせよ、巻七が歌に向かう際の大綱は、直叙的に景物を歌う類と、比喩的に歌う類との二大分類だ。そして、直叙と譬喩の二項対立というパターンは、中国六朝の梁の鍾嶸の『詩品』序における興・比・賦の「三義」に着想を得た「正述心緒」「寄物陳思」という二大原理として伊藤博の指摘するところであった。<sup>39)</sup> この二大原理に見あうものとして「詠物」「寄物」の分類項目が並ぶのが巻七なのだが、それが「雑歌」と「譬喻歌」という「部立」に蔽われ、吸収されることで巻七は『万葉集』の全体への繋がりを表示している。しかし、「寄物」の類を「相聞」ではなく「譬喻歌」としてまとめているところに、「三大部立」の変質はあらわである。

### 三一三 巻八の「知」

四季を分類の大綱とする巻八・巻十でも「春雑歌」と「春相聞」を分けるという形で、三大部立の概念が入り込んでいいる。ここではもはや「挽歌」を形式的にさえないれようとはしていないし、「三大部立」の言葉はもつとも外側の枠組みでもない。巻八の枠組みを形作っているのは、四季分類である。その四季のそれぞれの内部が「雑歌」と「相聞」に分かたれているのだ。

ところで、清水克彦の指摘によれば、「四季分類」は

「景」と「情」の関係にそつてなされている。清水は、「四季雑歌」の歌は「景」を「賞美」する「情」を表現するためのものであるとし、一方、「四季相聞」の歌の「景」は、恋の「情」を「譬喩するもの」として歌われるか、あるいは、「見立て」の方法で歌われるか、そのどちらかであるとしてゐる。<sup>(10)</sup>

要するに巻八で歌われる「景」と「情」は、「四季」で分類されるような、典型的な形に整理された「景」と「情」なのだ。清水はこれを「和歌的世界」にふさわしい「景」と「情」という。かつ、これを「四季」に沿つて配列するところに巻八の意味がある。

しかし、「景物」を四季で分類するという発想は、いかに構想されたのだろうか。

ここでも、巻八の背景として六朝の詩学を見ることは当然の方向だろう。

同時に、巻八「秋雑歌」に収められた「大伴宿祢家持秋歌三首」（二五九七—九九）の左注に、「右は、天平十五年癸未の秋の八月に物色を見て作る。」とあるのを想起したい。

「物色」は巻二十でも「悲怜物色変化」（四四八四）というふうに使われており、また、巻十九の「属目物花之詠」の「物花」も「物色」と同義の語であつて、これらは家持歌学のキーワードであり、家持語彙の一環でもある。

そして、この考え方が巻八の編纂の根本にも生かされていることになる。

鉄野昌弘の『大伴家持「歌日誌」論考』がしばしば引用する『文心雕龍』「物色篇」の有名な言葉に「春秋は代序し、陰陽は慘舒す。物色の動くや、心も亦揺く；四時の物を動かすこと深し」がある。「物色」とは四時の景物ということである。《物色が動く》とは季節の推移と共に景物が不断に変化することを言う。鉄野が「六朝・初唐の詩論では、外物、特に季節ごとの「物色」に感応することが、作詩の原理として重視された。」というように、これは詩学の概念として非常によく知られた言葉なのだが、作詩の根本となるところには心の動きがあり、心の動きは春秋の推移と共にあるとは、列島の上代の人びとに分かりやすい考えでもあつた。陰の気には心は重く沈み、陽の気にはのびやかに楽しくなる。物色が動けば心もそれに感応して揺れる。この六朝詩学の思想が巻八の歌を組織する固有の原理をなしているのだ。

ところが、巻八は、その四季ごとの景と情をさらに四季雑歌、四季相聞に分類する。もちろん、それは有効に働いているのだが、重要なのは、雑歌・相聞・挽歌という「三大部立」が上代の人びとの「歌」を捉えかえす枠組——歌学——の基盤に組み込まれているということである。

#### 四 卷々を繋げる水脈としての歌学の枠組み

瞥見に過ぎなかったが、巻七、巻八がそれぞれに固有なやり方で「漢字世界」の思考によって歌を組織化しながらも、なお、そこに「三大部立」を組み込んでいくありようを見た。そう見て初めて、これらの歌巻が、なお、そこに巻一・巻二由来の「三大部立」を組み込んで成り立つ意味が際立つ。要するに、「三大部立」は万葉歌学の基盤的な知なのであり、それを通じて『万葉集』は、複数の独立系を包摂しながらも、同時に、個々の独立系を超えた地平を垣間見させるのだ。

個々の巻を超えて『万葉集』全体を包む地平とは、要するに、「三大部立」という基盤の上に築かれていく万葉歌学の展開である。

「歌」をどうみるか、どう解釈するか、という意味での歌学的な「知」の働きが二十巻を底流で繋げるものとしてあるのであり、各巻の編纂方式は、中国詩学を背負いながらそれぞれ独自に組織されてある部類の諸原理として見出すことができる。かかる視座を提出することによって、ひとまず本稿の締めくくりをつけておきたい。

#### 注

- (1) 第一節は発表後に起稿したものであり、第二節以降は発表原稿に加筆訂正したものである。
- (2) 「集蔵体」については次の二つの拙稿を参照されたい。拙稿A「人麻呂歌集における『辞』の文字化をめぐる」、『論集上代文学』第三十三冊、二〇一一年、笠間書院。拙稿B「『万葉集』集蔵体論の展開」、『万葉集研究』第三十四集、二〇一三年、塙書房。
- (3) この件についてはとくに右のA論文を参照願いたい。
- (4) 澤瀉久孝、「戯書について」、『国語国文の研究』二二集、一九二八年。
- (5) 西澤A論文二一ページ、同B論文、九三ページ。
- (6) 西澤AB論文並びに西澤「テキストとしての『万葉集』」（『アナホリツシユ國文學』創刊第1号、三八ページ）参照。
- (7) ここで考証学的出典論というのは、書かれた語句に即した出典論をいう。
- (8) 芳賀紀雄、「典籍受容の諸問題」、『萬葉集における中國文學の受容』、二〇〇三年、塙書房。この論文で、芳賀紀雄は漢籍の受容論を契沖の『万葉代匠記』についての記述から始めている。
- (9) 契沖は文字の現前の仕方を「家々ニ様々ニ書タルヲ其マ、ニ写サレタル」と観た（『契沖全集』第一卷、一九七三年、岩波書店、一七七ページ）。
- (10) 伊藤博、『万葉集の構造と成立』上・下、一九七四年、



増書房。

- (11) 神野志隆光、『万葉集をどう読むか——歌の「発見」と漢字世界』、二〇一三年、東京大学出版会。
- (12) 『万葉集』をフラットに読むことを可能にするのは、むしろ、文字言語の次元だ。訓詁において「用例を並べる」という方法が有効なのは、文字レベルでは巻を超えた参照関係が有効に機能する証拠である。
- (13) 伊藤「構造と成立」上二〇三ページ、下二五二ページ参照。
- (14) ただし、契沖は定家を自説の先蹤としてあげる。藤原定家は「何拗本集之所見、徒勘他集之序詞哉」と従来の成立論の姿勢を強く批判し、続けて実際に『万葉集』を見てみると、諸兄の死後の歌も多くあることなどから大伴家持もその撰に関わっているのではないかと二段階論的な成立を考え始めている（統群書類従四五〇巻所収「定家卿長歌短歌説」、一九五九年、統群書類従完成会）。
- (15) 『契沖全集』第一巻、岩波書店、一九七三年、一六三ページ。
- (16) 同前、一六七ページ。
- (17) 同前、一六九ページ。
- (18) 同前、一九六ページ。
- (19) ①「十一日大雪落積尺有二寸、因述拙懐歌三首」（四二八五〜四二八七）、②「右歌六首兵部少輔大伴宿祢家持獨憶秋野聊述拙懐作之」（四三三一〜四三三二）、③
- 「陳私拙懐一首（并短歌）」（四三六〇〜四三六二）。
- (20) 同前、一六八ページ。
- (21) 小島憲之は「夜裏」が漢語の語性と日本語「しち」とを合わせて家持が造語したものであるとする（『万葉題詞のことは』、『上代文学』四十四号）。
- (22) 拙稿、「家持作品と日記的編纂の問題」、『高岡市万葉歴史館紀要』第二十二号、二〇一二年。
- (23) 「独り」の孤独感・疎外感の述懐ということは、家持作品を一貫するテーマの一つである。この問題に関しては鉄野昌弘『大伴家持「歌日誌」論考』（二〇〇七年、増書房）が随所で掘り下けている。
- (24) 『賀茂真淵全集』第一巻、一五ページ。
- (25) 『本居宣長全集』第六巻、一九七〇年、筑摩書房、四ページ。
- (26) 山田孝雄、「万葉集と大伴氏」、『万葉集考叢』、一九五五年、五四ページ。初出一九五一年と論文末尾に記載あり。なお、引用文中の旧字体は通行の新字体に訂し（たとえば、「さ」（二の字点）は「々」に書き換えた）、仮名遣いはもとのままとする。以下同様。
- (27) 前掲書、六七ページ。
- (28) 前掲書、六八ページ。
- (29) 前掲書、七四〜七五ページ。
- (30) 前掲書、七五〜七六ページ。
- (31) 品田大吉、「万葉集兩卷説」、『心の花』、大正二年一月号。

- (32) 徳田浄、『万葉集成立攷』、一九六七年。原巻一の想定に関する学説史上のプライオリティーに関しては、現時点では判断を保留する。
- (33) 伊藤、『構造と成立』下、二一四―二一五ページ。
- (34) 小島憲之、『上代日本文学と中国文学』中、一九六四年、塙書房、七七六ページ。
- (35) 前掲書、七八二ページ。
- (36) 前掲書、七八四ページ。
- (37) 土田知雄、「万葉集巻七の一考察」、『北海道学芸大学紀要』九巻一号、一九五八年九月。
- (38) 「詠物」は巻十一・十二の「正述心緒」に、「寄物」は「寄物陳思」に対応している。
- (39) 伊藤博、『万葉集の表現と方法 上』、一九七五年、塙書房、四〇四ページ以下。
- (40) 清水克彦、「情と景」、『万葉論集』、一九七〇年、桜楓社、五三一―五四ページ。
- (41) 鉄野昌弘注23書、三四〇ページ。